

## 自由図書の部 佳作

### 横山真由さん 法学部政治学科2年

『漫画君たちはどう生きるか?』

吉野源三郎原作，羽賀翔一漫画/ マガジンハウス

#### 「私たちはどう生きるか」

人生で一番自分が切なくなったフレーズを思い出してほしい。その中に、「もうひとりぼっちだ…」はあるまいか。私は何度も経験した。それほど苦しくなって胸が張り裂けそうな経験をしたとき、再び立ち上がりながらこれからどう生きるかを考えたことはないだろうか。この本の主人公コペル君はこの思い出を甦らせ再び今後の人生を考えさせてくれる。コペル君はただの仮想の人物ではない。コペル君の原体験がこの本に描かれているように、同時に私たちの原体験と共通しているものはないだろうか。

コペル君はデパートの屋上から人の行き交いを見た時、「ほんとうに人間って分子なのかも」と思う。そしてコペル君は人間の根底は同じで関わりあっていることに気づき、それゆえの連帯感にも気づいた。他人と根底では「同じ」という感覚がなければ人は疎外し合い孤独だろう。与えられたものに恩返ししたり、自分から与えたりしなければいくらでもすぐに孤独になれる。孤独ならばあらゆる感情を感じないだろう。孤独でないためには努力が必要である。

しかし、たとえ人類愛、兄弟愛を持ち「同じ」を感じていても不平等や差が世の中には存在する。それでも、人間の本質は尊敬し合い、気に掛け合い、慎み合うこと、かつ自分が中心の世界から他者へ敬意が移行することで人間は尊厳を保ち合う。私たちは分子であるならば、互いに手を取り結び合わなければならない。

思い出してほしい。この本の原作は1937年に出版された。きな臭い時代であった。日本が世界の中心になることを目指して残虐な行為を行っていた時代であった。そんな時コペル君は自分が世界の中心でなく、あわよくばそれは日本人でなく、僕たちは世界を構成している分子だと気づいた。まるで当時の体制に対する皮肉ともとれる。この本では個人が描いた夢を実現できる社会、権利と自由を持つ社会すなわち民主主義について、そして戦争という過ちに対する姿勢をどう持つかについてコペル君を通して書かれている。吉野は私たちを原点に立ち返らせるためだけでなく、疎外・憎しみをやめ、お互いに手を取り合う未来を望んでこの本を書いたのだろう。

コペル君の母は若かりし頃、重い荷物を持ち石段を登るおばあさんを助けられなかったことを思い出しコペル君にこう語った。「ずっと時間がたった今でもあのときぐずぐずしてしまった自分は心の中ではっきりと残っているの」、「もしかしたら潤一さんにももっともっと大きなことでやるべきことをできずに後悔することがあるかもしれない……。でも

ねたとえ苦しくても……その経験を忘れてはいけないの。これからの長い道のりの中で…  
…」と。これから起こる大戦争を予感していたような吉野の鋭さにドキリとするが、では  
1937年にこの本が生まれた時から後悔を生まない歴史を歩んだか？答えは明らかだ。決して  
違う。時代は吉野の願いとは反対に動いた。多くの人に傷を残した歴史を作った。けれど  
ども大戦争の前に吉野は人の真理、尊厳、過ち、素晴らしさを説いていた。そして彼はま  
るで今を生きる私たちに託したかのようにこんな言葉を残している。「自分の過ちを認め  
ることはつらい。しかし過ちをつらく感じるということの中に、人間の立派さもあるん  
だ」、「僕たちは、自分で自分を決定する力を持っている。だから誤りを犯すこともある。  
しかし——僕たちは、自分で自分を決定する力を持っている。だから、誤りから立ち直る  
こともできるのだ」と。私たちは分子ならばそれは違うと思ったときに集まり食い止める  
力をこれからは発揮できるだろうか。

だからこれからも私たちは心の中に住んでいるコペル君を育てていかなければいけな  
い。